長土呂遺跡群

聖原II遺跡

―長野県北佐久郡御代田町聖原II遺跡発掘調査報告書―

1990

御代田町教育委員会

長土呂遺跡群

聖原II遺跡

――長野県北佐久郡御代田町聖原II遺跡発掘調査報告書――

1990

御代田町教育委員会

例　言

1　本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の長土呂遺跡群聖原II遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、神津正氏の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。

3　本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。

4　本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◎　遺物復原・実測・拓本・トレース　　堤　隆。

◎　遺構写真　　堤　隆。

◎　遺物写真　　鳥居　亮。

5　本書は、御代田町教育委員会の責任のもとに 堤　隆 が執筆・編集した。

6　本調査の実施については、地権者神津正氏に深いご理解をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

7　本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

林幸彦、羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、助川朋広、竹原学、児玉卓文、長野県教育委員会文化課、佐久市農協、佐藤広毅。

凡　例

1　遺構の名称　　H→竪穴住居址　F→掘立柱建物址　D→土壙　M→溝状遺構

2　遺構のナンバーは、時代別・時期別になっておらず、ランダムである。

3　挿図の縮尺は、キャプションに明示してある。

4　図版の縮尺

遺物写真の縮尺については、土器が1：3、鉄器は1：2である。

5　遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6　出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、－は不明、（　）は推定値、〈　〉は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

7　土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

8　挿図中におけるスクリーントーンは、須恵器断面＝網点（太）、カマド＝網点（太）を表わす。

目　次

例　言
凡　例
目　次

I　発掘調査の概要……1
　1　発掘調査の経緯……1
　2　発掘調査の概要……2
　3　発掘区の設定と遺構の検出……2

II　聖原II遺跡の環境……4
　1　自然環境……4
　2　歴史環境……4

III　聖原II遺跡の層序……5

IV　遺構と遺物……6
　1　竪穴住居址……6
　2　掘立柱建物址……12
　3　溝状遺構……17
　4　表面採集遺物……19

V　総　括……20

引用参考文献……21

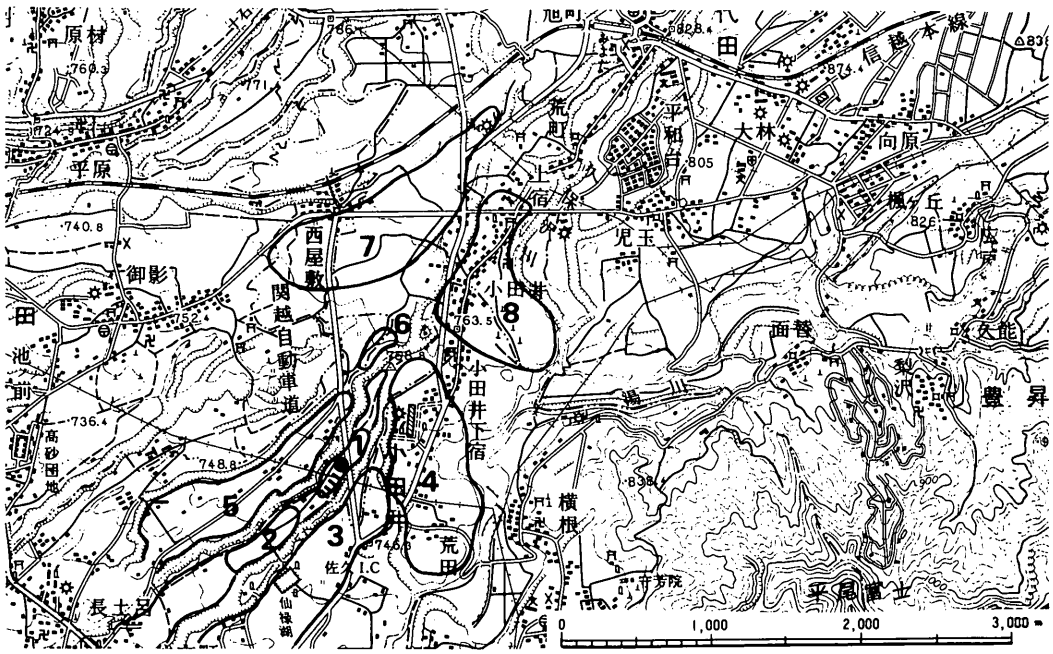
図　版……23

Ⅰ　発掘調査の概要

Ⅰ　発掘調査の経緯

長野県北佐久郡御代田町大字御代田字聖原地籍において、事務所を建設したいので、その地籍にかかる埋蔵文化財についてどのように取り扱ったらよいかという照会が、平成元年５月、地権者神津正氏より佐久市農協を通じて御代田町教育委員会にあった。当方では、この地籍が聖原Ⅱ遺跡にあたり、事務所建設の場合には事前の調査が必要となることを説明した。そうした場合試掘調査を実施することにより、より正確な調査計画の把握が可能であることを説明したところ、神津氏もこれに理解を示し、同年６月１・２日の二日間試掘調査を実施することとなった。

６月20日、その試掘調査結果に基づいて、長野県教育委員会文化課、御代田町教育委員会、地権者神津正氏および佐久市農協の四者において保護協議がもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し記録保存を行なうことで折合いがついた。調査は御代田町教育委員会が委託を受け、その費用の一切は神津正氏に負担して戴くことで了承いただいた。そのような経過の後、７月10日より発掘調査の運びとなった。調査は７月26日をもって終了した。



1．聖原Ⅱ遺跡　2．聖原Ⅰ遺跡　3．栗毛坂遺跡群　4．跡坂遺跡群
5．芝宮遺跡群　6．曽根城遺跡　7．鋳師屋遺跡群　8．中金井遺跡群

第１図　聖原Ⅱ遺跡の調査地点（●）と周辺の遺跡（１：5,000）

2　発掘調査の概要

1　遺 跡 名　長土呂（ながとろ）遺跡群　聖原（ひじりはら）II遺跡

2　所 在 地　長野県北佐久郡御代田町大字御代田字聖原

3　試掘期間　平成元年６月１日　～　平成元年６月２日

　発掘期間　平成元年７月10日　～　平成元年７月26日

4　整理期間　平成元年７月27日　～　平成元年11月30日

5　発掘理由　事務所建設に伴い、聖原II遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なう。

6　費用負担　調査費用総額を原因者である神津正氏が負担する。

7　事 務 局　◎　教育次長　山本岩正　◎　社会・同和教育係長　萩原茂

　◎　社会・同和教育係　内堀篤志、堤　隆

8　調査担当者　堤　隆　（御代田町教育委員会）

　調　査　員　上原邦一　（御代田町誌編纂室）

　補　助　員　伴野有希子

　協　力　者　大井けさみ、西沢悦子

3　発掘区の設定と遺構の検出

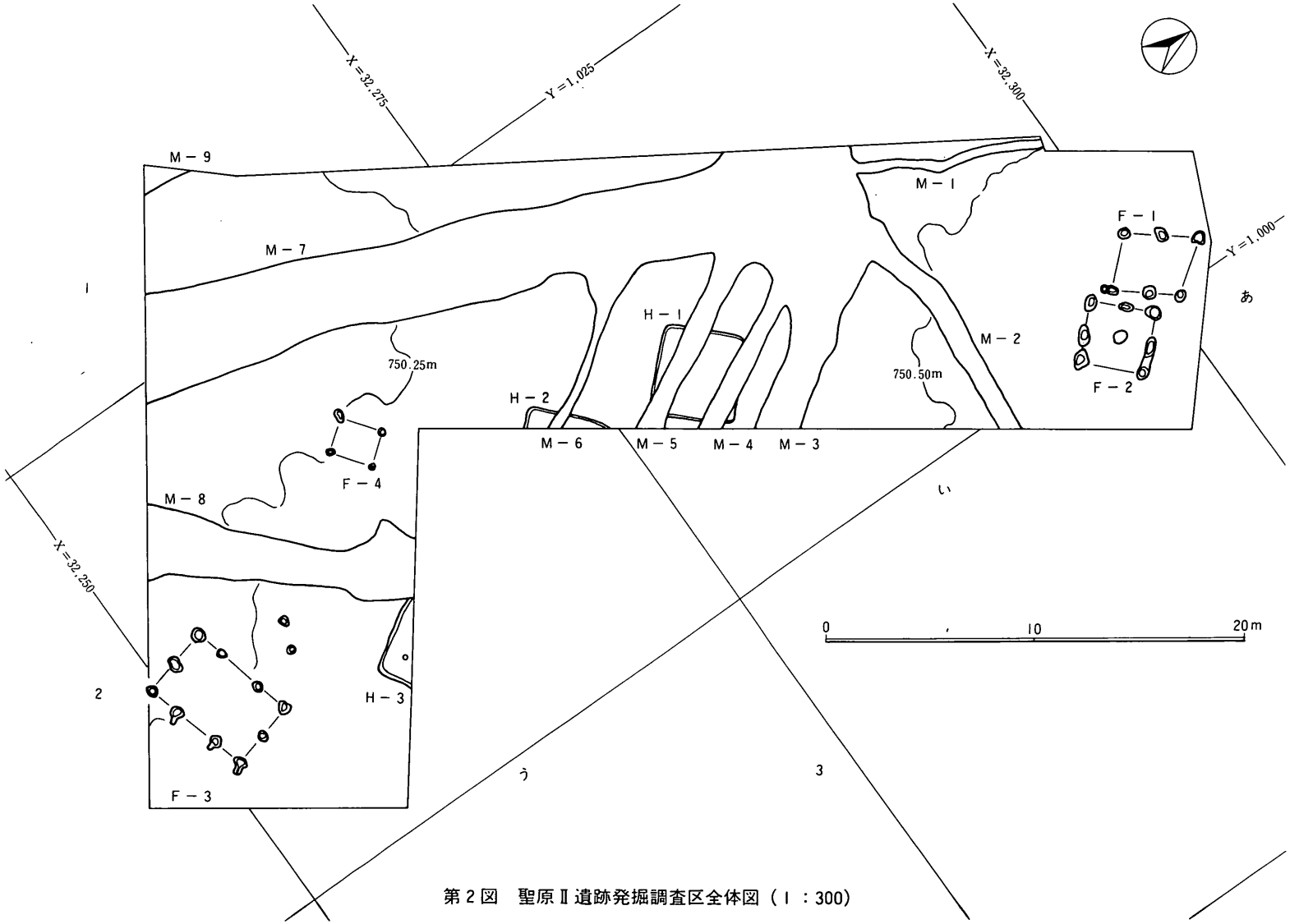
本調査の対象区は約2000m²が該当する。

この調査の対象区を、さきに発掘調査がなされている佐久市分の聖原II遺跡との対応も可能とするため、国家座標第Ⅷ系を用い、25m四方のグリッドを設定した。したがってグリッドのX軸は真北を指すようになっている。

検出された遺構は第２図および第１表に示したとおりである。

第１表　聖原Ⅱ遺跡（御代田町分）の検出遺構数と調査面積

遺 跡 名	竪穴住居址	掘立柱建物址	溝状遺構	調査面積
聖原II遺跡	3　軒	4　棟	9　基	約2000m²



第２図　聖原Ⅱ遺跡発掘調査区全体図（１：300）

II　聖原Ⅱ遺跡の環境

1　自然環境

聖原II遺跡は、浅間山（標高2560m）南麓の最末端部に位置し、浅間山の下腹より脈状に延びた“田切り”によって画された緩傾斜面台地上にある。“田切り”は、脆弱な火山灰地に侵食が繰り返された結果河床面が下がり、切り立った崖錐状をなす当地方特有の地形である。

一方、遺跡の北側には濁川が西流し、また東側には八風山塊が群馬県境まで連なるが、その西端には通称平尾富士（1155m）が聳え、森泉山へと続いている。

遺跡は、東径138度29分18,8346秒、北緯36度17分27,3632秒の位置にあり、標高750mを測る。

遺跡の基盤層は、浅間火山の軽石流期の噴出物「第1軽石流」層（C14年代＝13600年前頃）である。

2　歴史環境

聖原II遺跡をとりまく遺跡群については、第1図に示してある。

まず、聖原II遺跡の本地区に隣接して佐久埋蔵文化財調査センターが同年に調査を行なっており、竪穴住居址8軒（奈良時代）・掘立柱建物址2棟（奈良平安時代）・溝状遺構2基等が検出されている（佐久埋蔵文化財調査センター小林真寿氏のご教示による）。また、本遺跡の西は聖原遺跡Ⅰ（2）で、同じく平成元年に佐久埋文調査センターが調査を行なっており、3万m²を越える調査区からは、古墳時代後期の竪穴70軒以上・奈良時代の竪穴80軒余り・平安時代の竪穴150軒以上、掘立205棟が検出されている（佐久埋蔵文化財調査センター　1989）。

また、本遺跡の1km北には野火付・鋳師屋・前田・十二・根岸の5遺跡から構成される鋳師屋遺跡群がある（7）。鋳師屋遺跡群では古墳時代中期の竪穴（10軒）・古墳時代後期の竪穴（80軒）・奈良平安時代の竪穴（357軒）・奈良平安時代の掘立（434棟）が検出されている（御代田町教育委員会　1989、ほか）。

以上、古代集落のあり方をみると、当地域においては古墳時代中期よりわずかに人々の居住がなされはじめ、つづく古墳時代後期に拡大する。大幅な人口増となるのは奈良時代および平安時代の前半期であることがとらえられよう。ではそれ以前の弥生時代の集落はどうかというと、現在のところでは確認されていない。冷涼な気候地帯へとつづくの当地区においては、当時の生産基盤であった稲作も対応できず、したがってその集落もみられないということになろうか。

ところで奈良平安時代には、本遺跡の北方には『延喜式』記載の御牧・塩野牧、東方には御牧・長倉牧が存在していたものと考えられる。浅間山南麓の標高1000m付近の国有林、通称「塩野山」には、一辺50mを測る方形に囲われた土堤状の遺構が残っており、塩野牧の「駒飼の土堤」と称されている。また、こうした土堤状の遺構は軽井沢町発地においても認められており、軽井沢町の追分・借宿・中軽井沢でも「駒飼の土堤」といわれるものがみられる（土屋　1970)。いずれも、長倉牧の存在していたといわれる地籍である。

一方、官道として整備された東山道が本地域のいずれかを通過していたものとみられ、その駅のひとつである長倉駅が本地域北方の小田井地区に設置されたという説もだされている（一志1957)。ちなみに長倉駅では駅馬15頭がおかれたという。

さきの鋳師屋遺跡群は、多数の馬骨の出土から、こうした御牧塩野牧や東山道長倉駅に関連性が強いとの見方があり、近年では御牧塩野牧の経営にかかわった人々の集落ではなかったかという見解が有力視されている。鋳師屋遺跡群は、本遺跡に隣接するだけにその性格については興味深いところである。

さて中世においては、本遺跡の北には八条院領大井庄の直営田である佃が存在したといわれている。また、13～15世紀にかけての遺構と遺物が、野火付遺跡と前田遺跡から検出されている。遺構は60基以上にもおよぶ竪穴状遺構、遺物では貿易陶磁である青磁・白磁、渡来銭、石製硯等である。一方、中世～戦国期の城郭としては、本遺跡の北に曽根城、東に金井城と小田井城がある。ことに金井城は工業団地造成にともなって、破格の８万m²が調査され、その全容が解明されつつある現状である。

III　聖原Ⅱ遺跡の層序

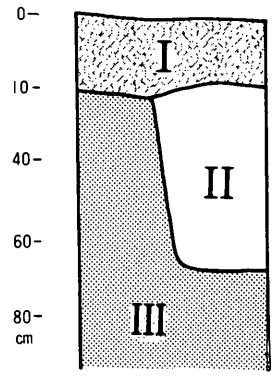
第３図に聖原II遺跡の基本層序を示した。

Ⅰ層　約20cmの厚さを測る耕作土層（黒褐色＝10YR2/3)。

II層　遺構覆土層（黒褐色＝10YR2/3)。

III層　ローム層（褐色＝10YR4/4)。

III層の下位は、遺跡の基盤層である浅間の第１軽石流層（BP13600y）となっている。遺構の確認面は、III層上面である。



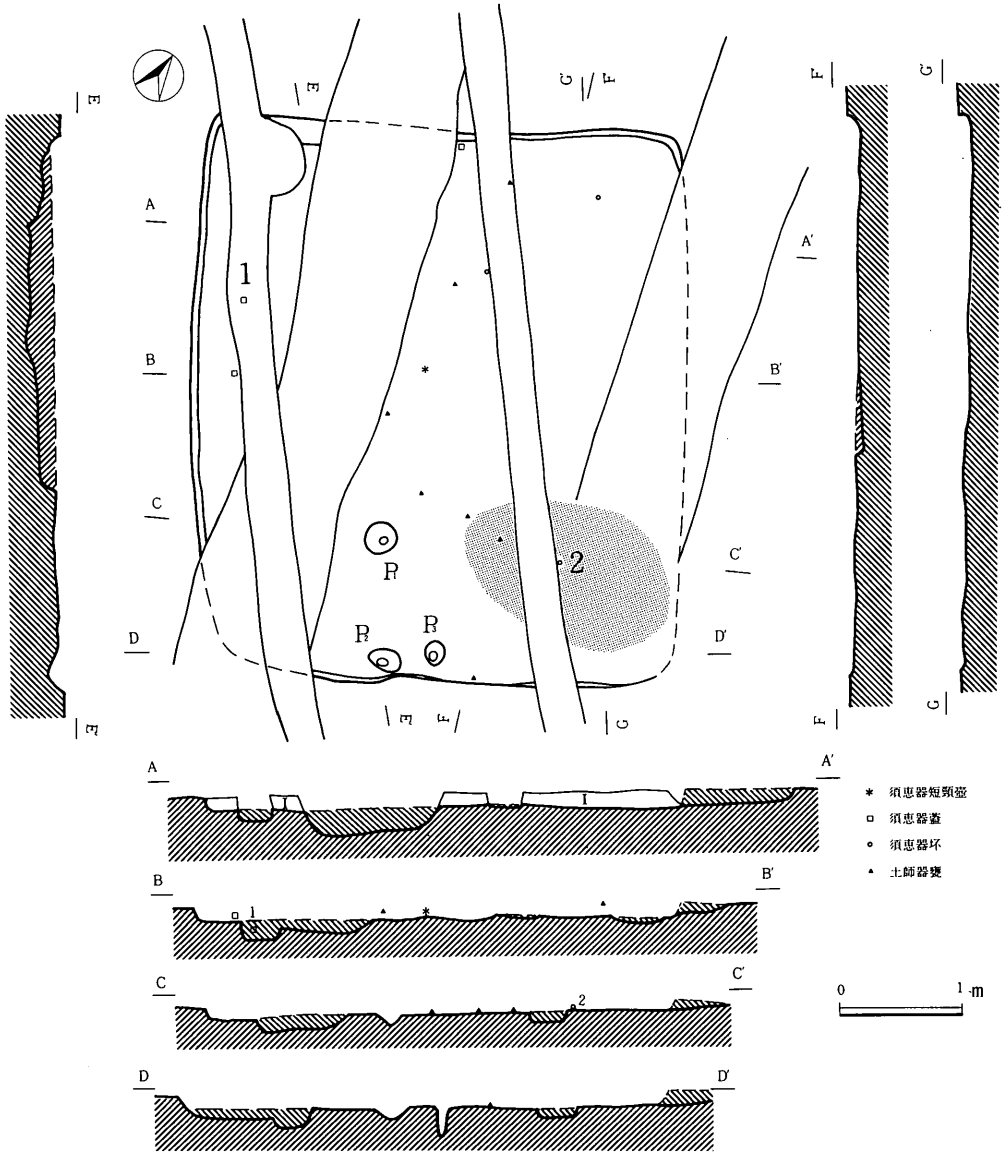
第３図　基本層序

Ⅳ　遺構と遺物

Ⅰ　竪穴住居址

（Ⅰ）Ｈ－Ⅰ号住居址

住居址　第４図



第４図　Ｈ－Ⅰ号住居址実測図（１：60）

H－1号住居址は、い－2グリッドにおいて検出され、M－4・M－5号溝状遺構に切られ、また肥料トレンチャーにより溝状の破壊を被っていた。

本址は、南北4.3m東西3.95mの隅丸長方形を呈し、床面積16.0m²を測り、南北軸方向はN－33°－Wを指す。壁高は、10～15cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質であるが、貼り床ではない。

ピットは、住居址の南半よりP_1が、また南北壁際よりP_2P_3が対で認められた。P_1は25×25cmで深さ10cm、P_2は28×15cmで深さ8cm、P_3は18×15cmで深さ23cmを測る。

遺物は、2の坏が東南区の床面直上より正常位で検出された。また、1の蓋は北西区の攪乱土中出土である。

カマド付属の有無は確認できず、東南区の床面上に焼土の分布（網点部）が認められたのみであった。

覆土は、1層のみである。I層は径3mm前後のパミスを多く含み、径7～10mm前後のスコリアも若干含む黒色土層（7.5YR2/1）であった。埋土か自然堆積土かどうかは不明である。

遺　物　第5図

遺物は、須恵器では坏・蓋・短頸壺、土師器では甕の、それぞれ破片計17片が検出されているにすぎない。このうち本住居に遺棄されたと考えられるのは、2の須恵器坏で、それ以外は遺棄・廃棄・混入のいずれの状況によって残されたものかはわからない。

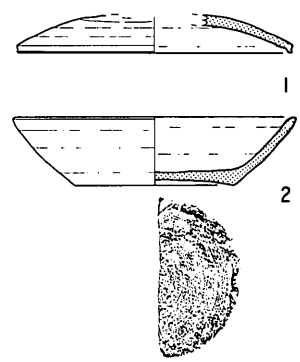
1は、須恵器蓋で、ロクロ整形の後天井部に手持ちヘラケズリがなされている。ツマミ部はおそらく宝珠形を呈するものであろう。

2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

なお、この2点以外には図示し得る遺物はなかった。

時　期

本住居址は、2の須恵器坏をもって、8世紀末～9世紀初頭に位置付けられよう。



第5図　H－1号住居址
出土遺物（1：4）

第2表　H－1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	蓋 (須)	— — (14,8)	ツマミ部は、形状不明。	外面　ロクロヨコナデ 天井部回転ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ　(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色 (7,5Y　5/1)
2 (回)	坏 (須)	(15,7) 3,6 8,7	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り未調整 内面　ロクロヨコナデ　(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄橙色 (10YR　6/3)

（2） H－2号住居址

住居址　第6図

H－2号住居址は、う－2グリッドにおいて検出された。調査対象となったのは、その北側一部のみであるが、部分的に溝状遺構に切られ、また肥料トレンチャーにより溝状の破壊を被っていた。

東西3.95mを測り、隅丸方形を呈すると考えられるもので、南北軸方向はN－30°－W前後を指すものとおもわれる。壁高は、40～50cmを測る。

カマドは、北壁中央に設置されていた。またピットは、調査部分においては検出されなかった。

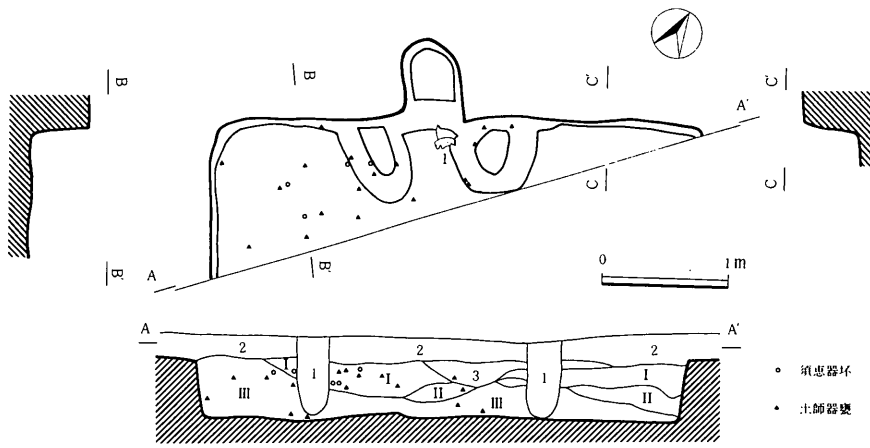
遺物の分布については、図中にドットで示したが、人為埋土中に含まれる廃棄もしくは混入遺物である。

住居址中の覆土は3層に分層され、人為埋土的な堆積をみせていた。I層はローム粒子が多量に混じる暗褐色土層（10YR3/3）、II層はローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR2/1）、III層はローム粒子が大量に混じる黒褐色土層（10YR2/3）であった。遺物は、1の土師器甕を除きいずれもこの覆土3層中より出土している。またセクションの1～3層であるが、1層は肥料トレンチャーによる攪乱層、2層は耕作土、3層は溝状遺構覆土である。

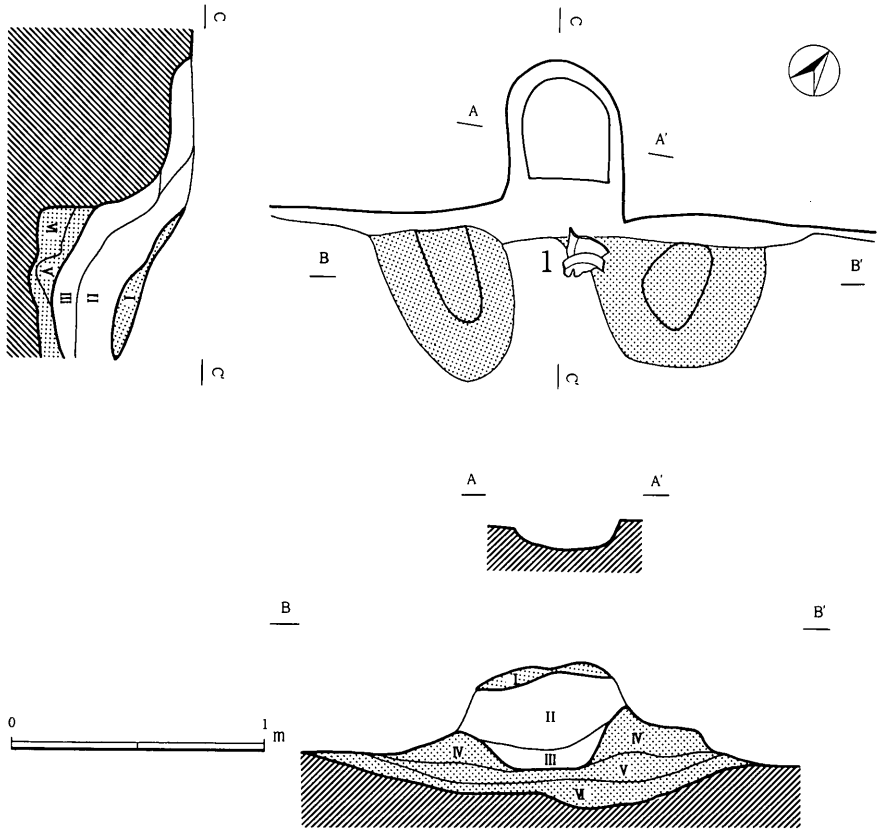
カマド　第7図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。

本カマドは、部分的に破壊を被っていたが、左右両袖の一部・天井部の一部をとどめていた。



第6図　H－2号住居址実測図（1：60）

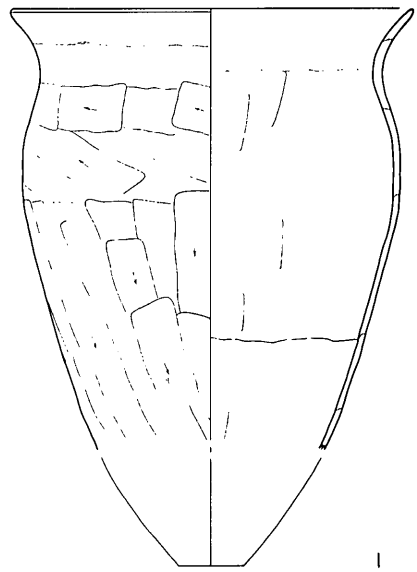


第７図　Ｈ－２号住居址カマド実測図（１：30）

また、煙筒として図の１の土師器甕が用いられていた。

袖および天井部は、主にローム層を用いて構築されていた（網点部）が、その芯材としての面取り軽石等は、とりあえずは認められなかった。天井部のＩ層は、褐色ローム層(10YR4/6)。袖部のⅣ層は多量の焼土を含む褐色ローム層（10YR4/6）であった。しかし火床部はローム層が用いられず、Ｖ層は黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅵ層は黒褐色土層（10YR2/3）であった。遺物はいずれもこの埋土中から出土している。

堆積土（II・III層）は、II層が少量のカーボン・焼土を含む暗褐色土層(10YR4/6)、III層が少量のカ



第８図　Ｈ－２号住居址出土遺物（１：４）

第３表　Ｈ－２号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	甕 (土)	(21,5) — —	口縁部はくの字状に外反する。 最大径は口縁部にある。	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7,5YR　7/3)

ーボン・多量の焼土・若干の灰を含む暗褐色土層（10YR3/4）であった。

遺　物　第８図

遺物は、須恵器では坏、土師器では甕が検出されているが、１をのぞきいずれも細片で図示し得なかった。出土点数は計24点である。

１は土師器甕で、くの字状口縁を呈し、最大径が口縁部にあるものである。

時　期

本住居址は、１の土師器甕により、８世紀後半に位置付けられよう。

（３）Ｈ－３号住居址

住居址　第９図

Ｈ－３号住居址は、う－２グリッドにおいて検出された。調査対象となったのは、その南西部分のみである。

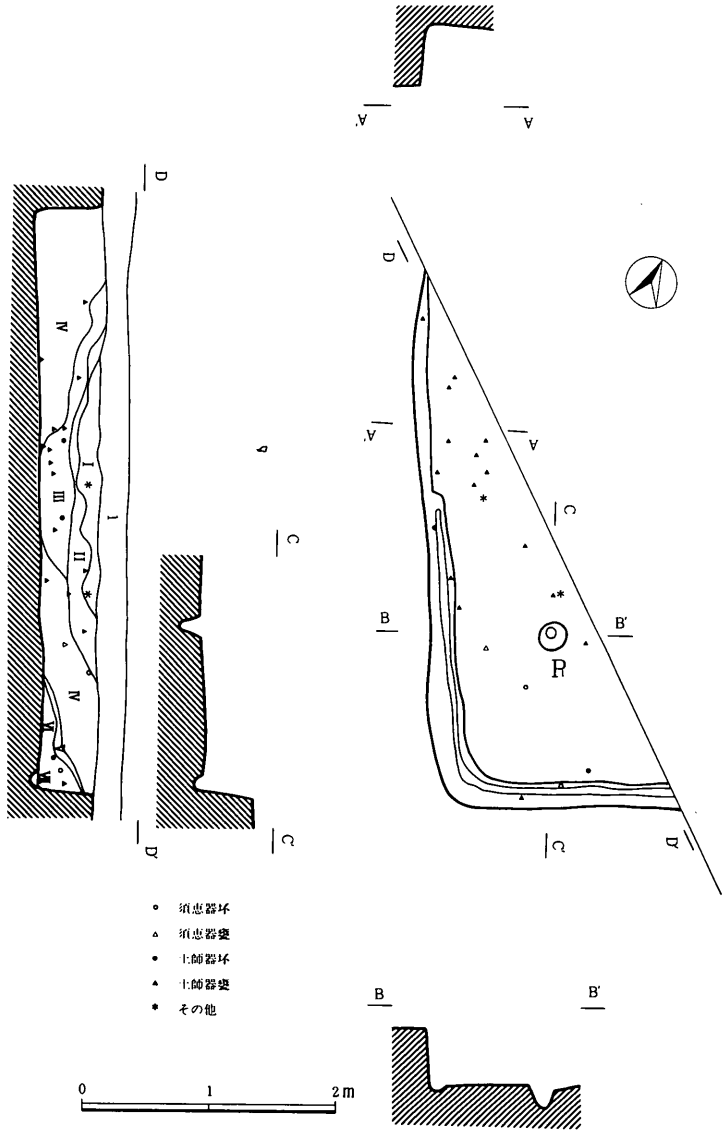
本住居址は、隅丸方形を呈し、南北軸方向Ｎ－28°－Ｗを指す。壁高は、40～50cm前後を測る。壁溝は、南壁側から西壁側半分に、幅10～15cm前後、深さ８cm前後のものが続いている。

ピットは、住居址の南西区より主柱穴と考えられるP_1が検出された。P_1は25×23cm深さ18cmを測る。

住居址中の覆土は７層に分層され、人為埋土的な堆積をみせていた。Ⅰ層はローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR1.7/1）、Ⅱ層はローム粒子が多く混じる黒褐色土層（10YR2/2）、Ⅲ層はローム粒子が多量に混じる黒褐色土層(10YR2/2)、Ⅳ層はローム粒子が大量に混じる黒褐色土層（10YR2/3)、Ⅴ層はローム粒子をあまり含まない黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅵ層はローム粒子が大量に混じる黒褐色土層（10YR2/3)、Ⅶ層は黒褐色土層（10YR2/2）であった。

遺　物

遺物は、須恵器では坏・長頸瓶・甕、土師器では坏・甕の、それぞれ破片計26片が検出されているにすぎず、図示し得るものはなかった。これらは、埋土内に廃棄もしくは混入のいずれかの状況によって残されたもので、本住居址には伴わないものと考えられる。



第９図　Ｈ－３号住居址実測図（１：60）

時　期

本住居址は、時期決定の指標となり得る遺物がないため、その位置付けが困難であるが、周囲の状況から判断するに八～九世紀の所産とみて大過あるまい。

2　掘立柱建物址

（Ⅰ）　Ｆ－１号掘立柱建物址

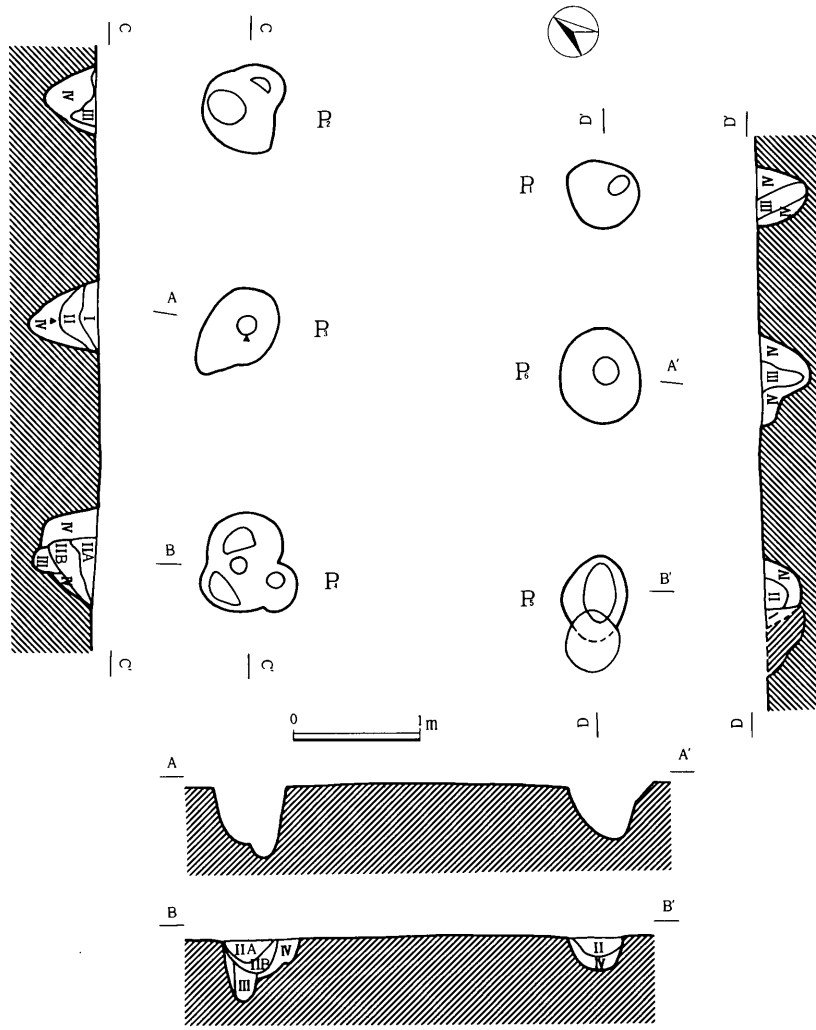
第10図

Ｆ－１号掘立柱建物址は、あ－２グリッドにおいて検出された。本址は、Ｆ－２号掘立柱建物址と重複するが、Ｆ－２が本址より新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、２間×１間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.8m東西3.6mの矩形のプランを呈し、面積10.1m²を測る。柱間は、東西列では1.5～1.9mを測る。南北軸方向は、N－36°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは不整形を呈していた。

その覆土は、４層に分層され、Ⅰ層がローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR2/3)、Ⅱ層がローム粒子をよく含む黒褐色土層（10YR2/2）で、いずれも柱抜き取り後の埋土である。Ⅲ層は柱痕



第10図　Ｆ－１号掘立柱建物址（１：60）

の黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅳ層は柱痕下の黒色土層（10YR2/1）であった。

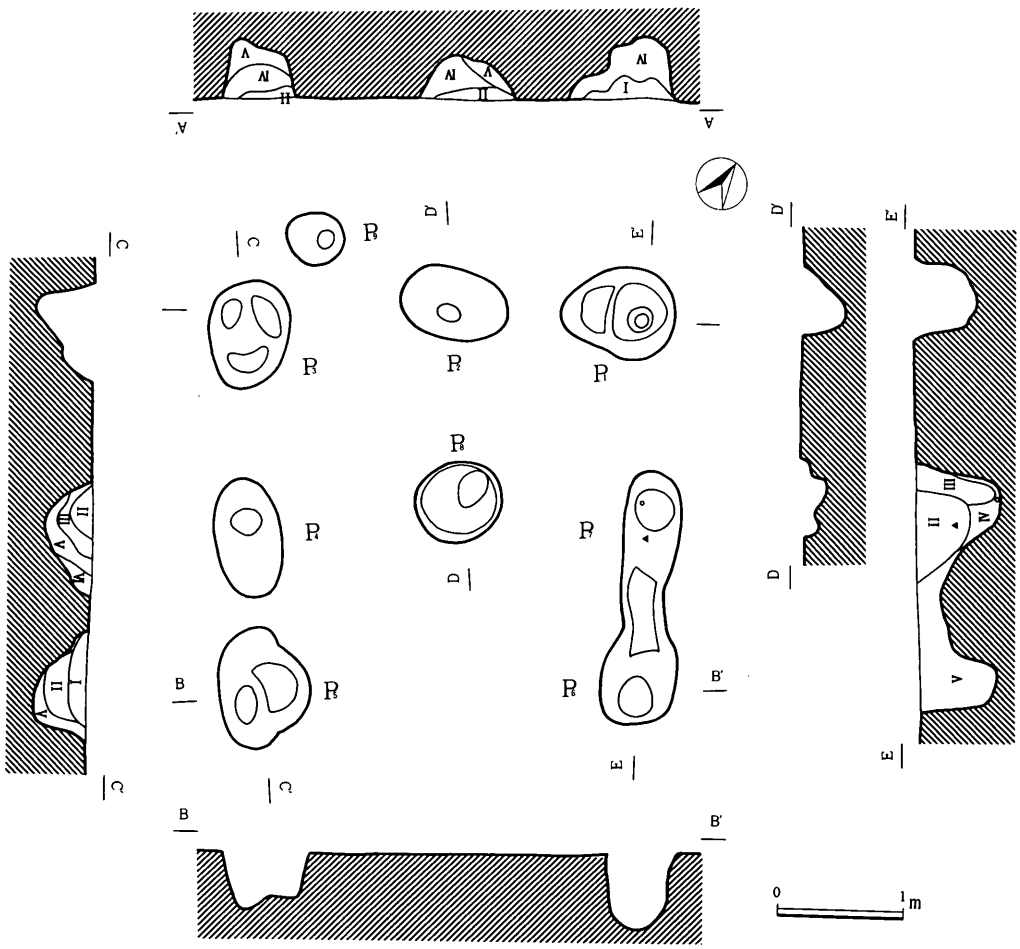
各ピットにおいて柱痕がとらえられたものはP_1 P_2 P_4 P_6で、径11～22cmを測った。

遺物は、P_3のⅣ層より、奈良・平安時代の甕の破片が出土している。よって本址はこの甕の示す時間よりは新しい建物、F－2号掘立柱建物址よりは古い建物としてとらえられる。いずれにしても奈良・平安時代の所産としてみることに大過あるまい。

（2）F－2号掘立柱建物址

第11図

F－2号掘立柱建物址は、い－3グリッドにおいて検出された。本址は、F－1号掘立柱建物址と重複し、F－1より新しいものとしてとらえた。



第11図　F－2号掘立柱建物址（1：60）

本掘立柱建物址は、２間×２間（南列１間）の掘立柱建物址である。一応図示はしたが、プラン中央のもの（P_8）が柱穴として把握できるかどうかが不明確であるため、側柱式か総柱式かの判断はし難い。

南北3.0m東西3.0mの方形のプランを呈し、面積9.0m²を測る。柱間は1.5m程度を測る。

南北軸方向は、N－34°－Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形・楕円形もしくは不整形を呈していた。P_6P_7間は溝による連結をみせる、いわゆる溝持ちである。

その覆土は、６層に分層され、Ⅰ層はローム粒子を大量に含む褐色土層(10YR4/6)、Ⅱ層がローム粒子を若干含む黒色土層（10YR1.7/1）で、いずれも柱抜き取り後の埋土である。Ⅲ層は柱痕の黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅳ層は柱痕下の黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅴ層はローム粒子を大量に含む褐色土層（10YR4/6)、Ⅵ層は若干の黒色土粒子を含む暗褐色ローム層（10YR3/4）であった。

各ピットにおいて柱痕がとらえられたものは、P_7のみで、径18cm前後を測った。

遺物は、P_7のⅡ層より奈良・平安時代の甕の破片が、Ⅳ層より回転糸切りの須恵器坏底部が出土している。よって本址はこの坏底部の示す時期（８世紀第Ⅳ四半期以降）よりは新しい建物、くわえてＦ－１号掘立柱建物址よりも新しい建物としてとらえられる。いずれにせよ、平安時代の所産であることには相違あるまい。

（３）Ｆ－３号掘立柱建物址

第12図

Ｆ－３号掘立柱建物址は、う－２グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、２間×３間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.4m東西5.3mの矩形のプランを呈し、面積18.0m²を測る。柱間は、南北列では1.2～2.2m東西列では1.5～1.7mを測る。また南列ではP_7～P_9に、P_{11}～P_{13}の３つのピットが付属する。

本址の南北軸方向は、N－16°－Wを指す。

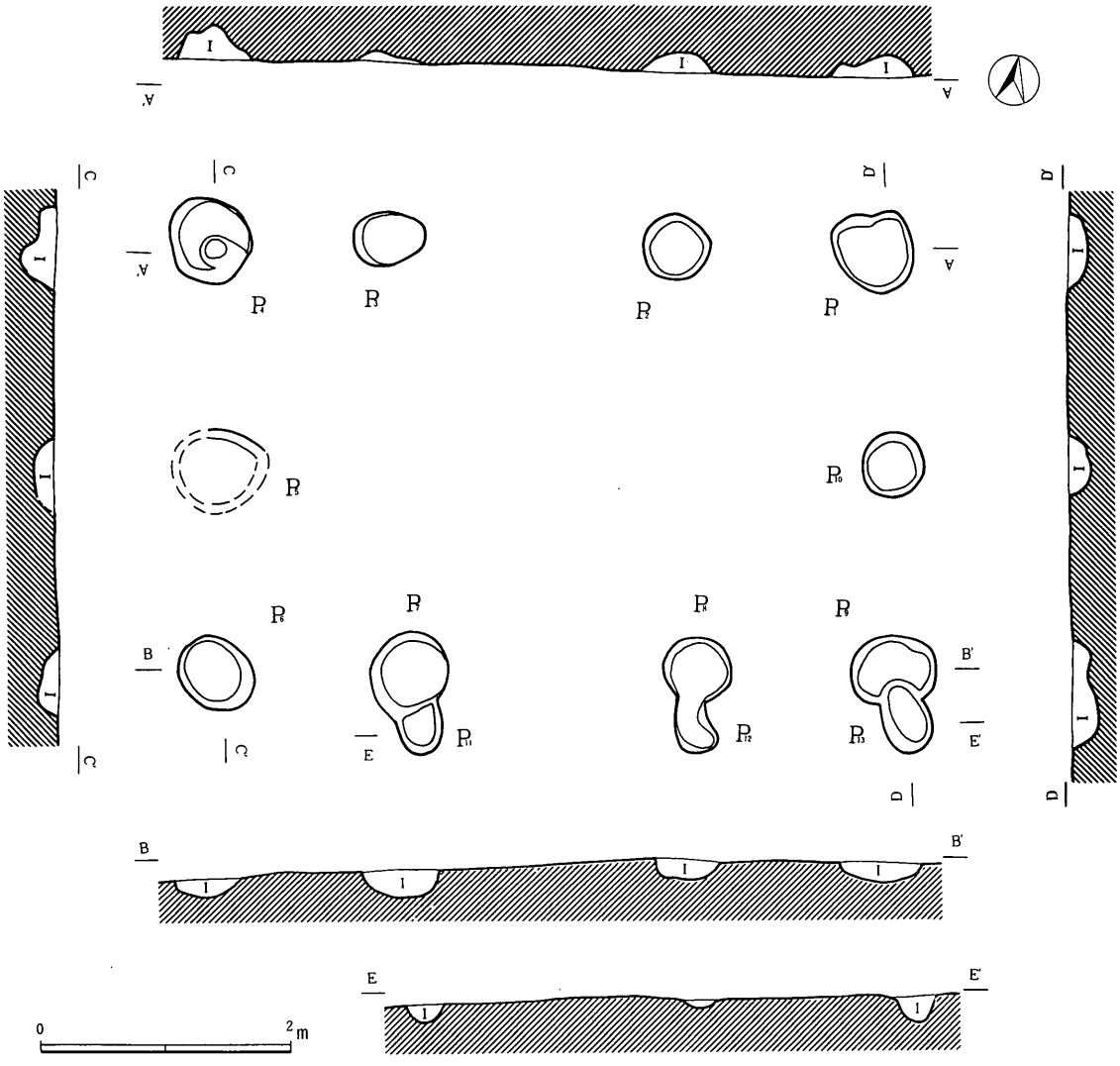
各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その覆土は、１層のみで、ローム粒子をまったく含まないしまりのない黒色土層(10YR1.7/1)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は出土していない。

なお、本掘立柱建物址は、奈良・平安時代の所産であろうが、その詳細な時期は不明である。



第12図　F－3号掘立柱建物址実測図（1：60）

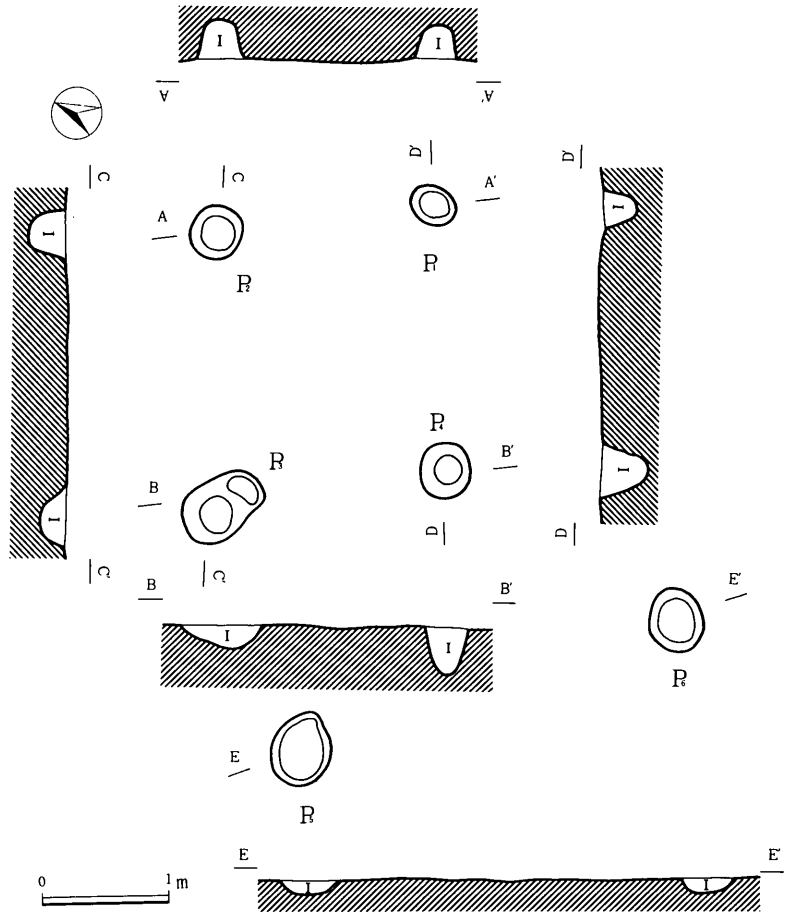
（4）F－4号掘立柱建物址

第13図

F－4号掘立柱建物址は、う－2グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×1間の総柱式の掘立柱建物址で、南北1.8m東西2.1mのやや歪んだ矩形のプランを呈し、面積3.8m²を測る。また、やや離れて関連するかとも考えられるP_5・P_6の2個のピットもみとめられた。

本址の南北軸方向は、N－32°－Wを指す。



第13図　F－4号掘立柱建物址（1：60）

各ピットの掘り方のプランは、不整円形・楕円形を呈していた。

その覆土は、ローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR2/1）Ⅰ層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は出土していない。

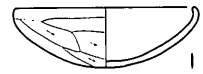
なお、本掘立柱建物址は、奈良・平安時代の所産であろうが、その詳細な時期についてはとらえられない。

3　溝状遺構

調査区内において溝状遺構は９基検出された（第15図)。これらM－１～M－９は、いずれも自然流路と考えられるものである。このうちM－１～M－７は、西北で一か所に集結している。これらの溝状遺構は、奈良・平安時代の住居址を切っており、またその覆土中に奈良・平安時代の遺物を多量に含んでいる。よってそれが機能していたのは、奈良・平安時代以降であることはいえよう。おおよそは中近世のものとみて大過あるまい。以下には、各溝状遺構の土層説明を記す。

（１）M－１号溝状遺構

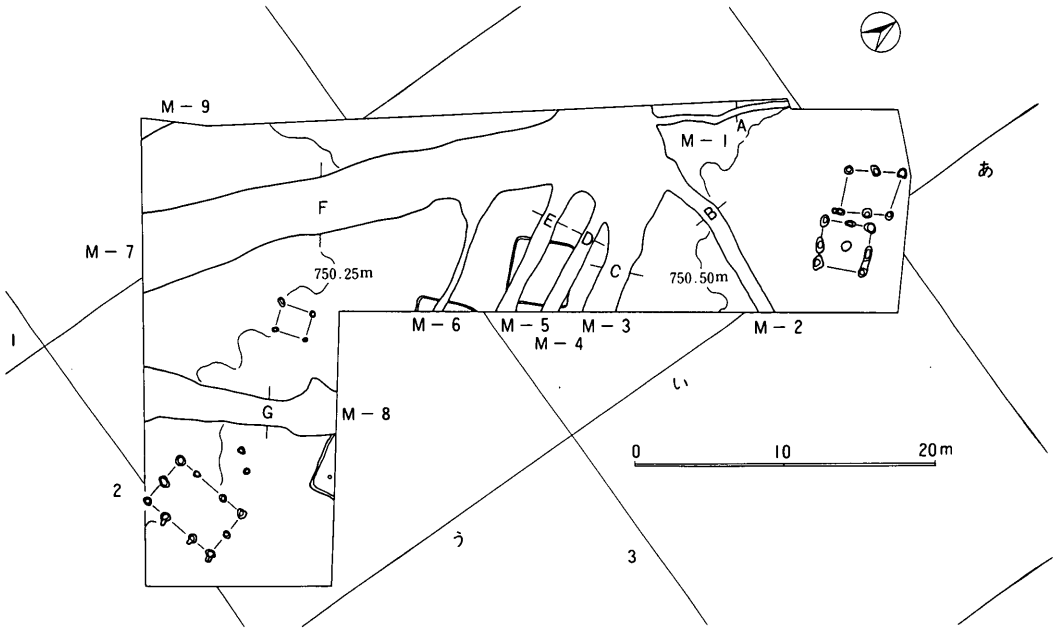
覆土は、２層に分層された。Ⅰ層は黒褐色土層（10YR2/3)、II層は暗褐色土層（10YR3/4）である。



第14図　M－１号溝状遺構
出土遺物（１：４）

（２）M－２号溝状遺構

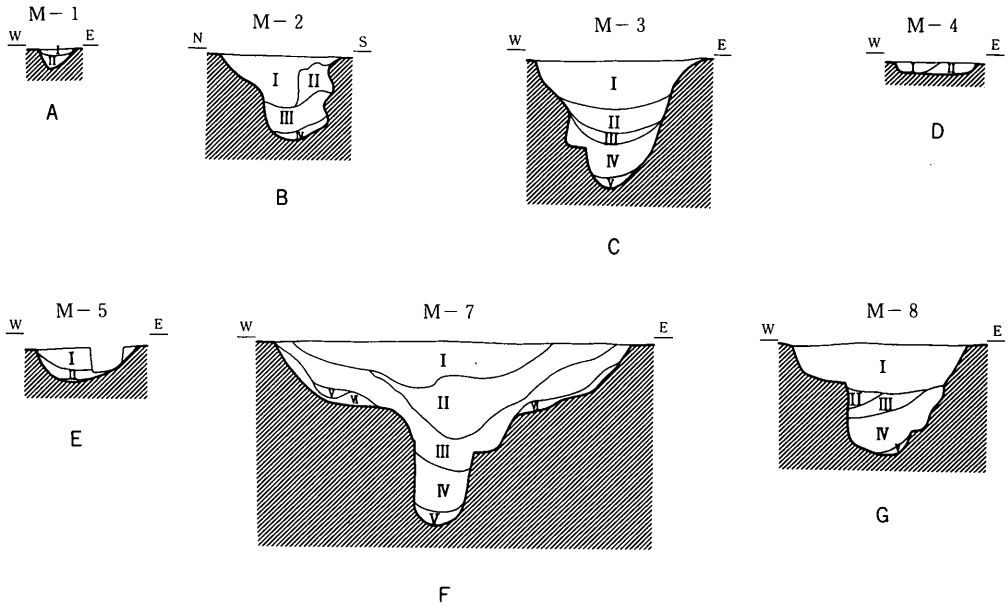
覆土は、４層に分層された。Ⅰ層は水流後の体積である黒色土層(10YR1.7/1)、II層は細粒砂層（にぶい黄褐色＝10YR4/3)、III層は径５～10㎜前後の小石を大量に含む砂利層（灰黄褐色＝10YR6/1)、IV層は粗粒砂層（灰白色＝10YR7/1）であった。



第15図　溝状遺構分布図（１：500）

第４表　Ｍ－１号溝状遺構出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (土)	(9.9) 3.2	体部湾曲し、底部丸底。	外面　口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土は砂粒を含みにぶい橙色 (7.5YR　7/4)



第16図　溝状遺構断面図（１：80）

（３）Ｍ－３号溝状遺構

覆土は、５層に分層された。このうちＩ・II層は水流後の体積である。Ｉ層は黒色土層（10YR1.7/1)、II層は黒褐色土層(10YR2/2)、III層は細粒砂層(暗褐色＝10YR3/3)、IV層は砂利層(灰白色＝10YR7/1)、Ｖ層は粗粒砂層（灰白色＝10YR7/1）であった。

（４）Ｍ－４号溝状遺構

覆土は、２層に分層された。Ｉ層は細粒砂を若干含む黒褐色土層(10YR3/2)、II層は黒色土層(10YR1.7/1）であった。

（５）Ｍ－５号溝状遺構

覆土は、３層に分層された。Ｉ層は水流後の体積である黒褐色土層(10YR3/2)、II層は細粒砂をよく含む暗褐色土層（10YR3/4)、III層は褐色土層（10YR4/4）で

あった。

（6） M－7号溝状遺構

覆土は、6層に分層された。このうちⅠ・Ⅱ層は水流後の体積である。Ⅰ層は黒褐色土層（10YR2/2)、Ⅱ層は黒色土層（10YR1.7/1)、Ⅲ層は細粒砂層（にぶい黄褐色＝10YR4/3)、Ⅳ層は粗粒砂層（灰白色＝10YR7/1)、Ⅴ層は砂利層（灰白色＝10YR7/1)、Ⅵ層は黄褐色土層（10YR5/8)であった。

（7） M－8号溝状遺構

覆土は、5層に分層された。Ⅰ層は水流後の体積である黒褐色土層(10YR2/3)、Ⅱ層は粗粒砂層（灰白色＝10YR7/1)、Ⅲ層は細粒砂層（にぶい黄褐色＝10YR4/3)、Ⅳ層は粗粒砂層（灰白色＝10YR7/1)、Ⅴ層は黒色土層（10YR1.7/1）であった。

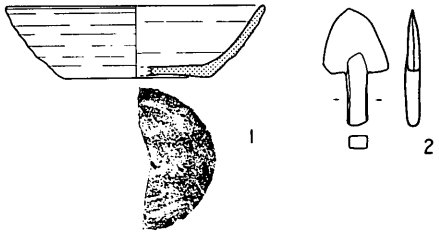
4　表面採集遺物

第17図

表面採集遺物には、1の須恵器坏と2の鉄鏃がある。

1の須恵器坏は回転ヘラキリ未調整の底部をみせるものである。

2の鉄鏃は基部を欠損している。



第17図　表面採集遺物（1＝1：4，2＝1：2）

第5表　表面採集遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	現存長	現存幅	現存厚	現重量	材質	備考
1	鏃	30.7mm	16.7mm	5.7mm	3.2g	鉄	基部欠損

第6表　表面採集遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1 (回)	坏 (須)	〈14.0〉 3.9 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラキリ未調整 内面　ロクロヨコナデ　(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい灰色 (7.5Y　5/1)

V 総　括

聖原II遺跡からは、わずかな調査面積ではあったが、竪穴住居址3軒（奈良・平安時代）・掘立柱建物址4棟（奈良・平安時代）・溝状遺構9基等が検出された。

さきにふれたが、聖原II遺跡の本地区に隣接しては、佐久埋蔵文化財調査センターが同年に調査を行なっており、竪穴住居址8軒（奈良時代）・掘立柱建物址2棟（奈良・平安時代）・溝状遺構2基等が検出されている。これらのうち溝状遺構は、本遺跡の2基の溝状遺構に接続する一連のものとしてとらえられる。また、奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物も幾つかの時期的な組み合わせにより、あるひとつの集落を構成したものであったことだろう。この地区の調査成果が公表された時点で、両地区の遺構群を対比させてみる必要性があるだろう。

加えて本遺跡の西には、同じく平成元年に佐久埋文調査センターが調査を行なった聖原遺跡Iがあり、3万㎡を越える調査区からは、古墳時代後期の竪穴70軒以上・奈良時代の竪穴80軒余り・平安時代の竪穴150軒以上、掘立205棟が検出されている（佐久埋蔵文化財調査センター　1989)。この遺跡の奈良・平安時代の住居からは、『伯万私印（はくまんのしいん)』と読める石印が発見されており（信濃毎日新聞、1989・12・7日付報道)、その解釈などをふまえ、集落の性格解明がまたれるところである。こうした本遺跡近隣の大規模で精緻な調査により、本遺跡の位置付けが定まってくることが期待されよう。

一方、本遺跡の1㎞北には野火付・鋳師屋・前田・十二・根岸の5遺跡から構成される鋳師屋遺跡群がある。鋳師屋遺跡群では古墳時代中期の竪穴（10軒）・古墳時代後期の竪穴（80軒）・奈良・平安時代の竪穴（357軒)、奈良・平安時代の掘立（434棟）が検出されている（御代田町教育委員会　1989、ほか)。翻って本遺跡の1㎞南には、関越自動車道路建設に伴い検出された栗毛坂遺跡群の奈良・平安時代の集落がある（長野県埋蔵文化財センター　1989)。

佐久平北部は、現在開発ラッシュの様相を呈しており、残念なことに埋蔵文化財は大きな打撃を受けつつある。反面、それに伴う発掘調査成果により、遺跡群を越え、ある時代ひとつの地域相を浮き彫りにすることもあながち不可能ではないように思われる。小規模の調査ではあったが、聖原II遺跡の発掘調査成果もその解明の一端を担う時がくることであろう。

引用参考文献

一志茂樹　1957　『御代田の古史を探る』　御代田村誌編纂委員会

小諸市教育委員会　1988　『鋳物師屋遺跡』

佐久市教育委員会　1984　『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』

佐久市教育委員会　1988　『鋳師屋遺跡II』

佐久市教育委員会　1988　『前田遺跡』　―第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次発掘調査概報―

佐久埋蔵文化財調査センター　1989　『長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅰ―現地説明会資料―』

土屋長久　1970　「信濃長倉牧址にある上代牧場遺構」（『長野県考古学会誌』9）

長野県埋蔵文化財センター　1988　『長野県埋蔵文化財センター年報』5

樋口和雄　1988　「御代田町の自然環境と地質」（『十二遺跡』）

御代田町教育委員会　1985　『野火付遺跡』

御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』

御代田町教育委員会　1988　『十二遺跡』

御代田町教育委員会　1989　『根岸遺跡』

1　聖原Ⅱ遺跡航空写真　㈱協同測量社撮影

2　H－1号住居址

図版二　H—2号住居址・H—3号住居址

H—2号住居址

H—2号住居址
カマド

H—3号住居址

図版三　F—1・2・3号掘立柱建物址

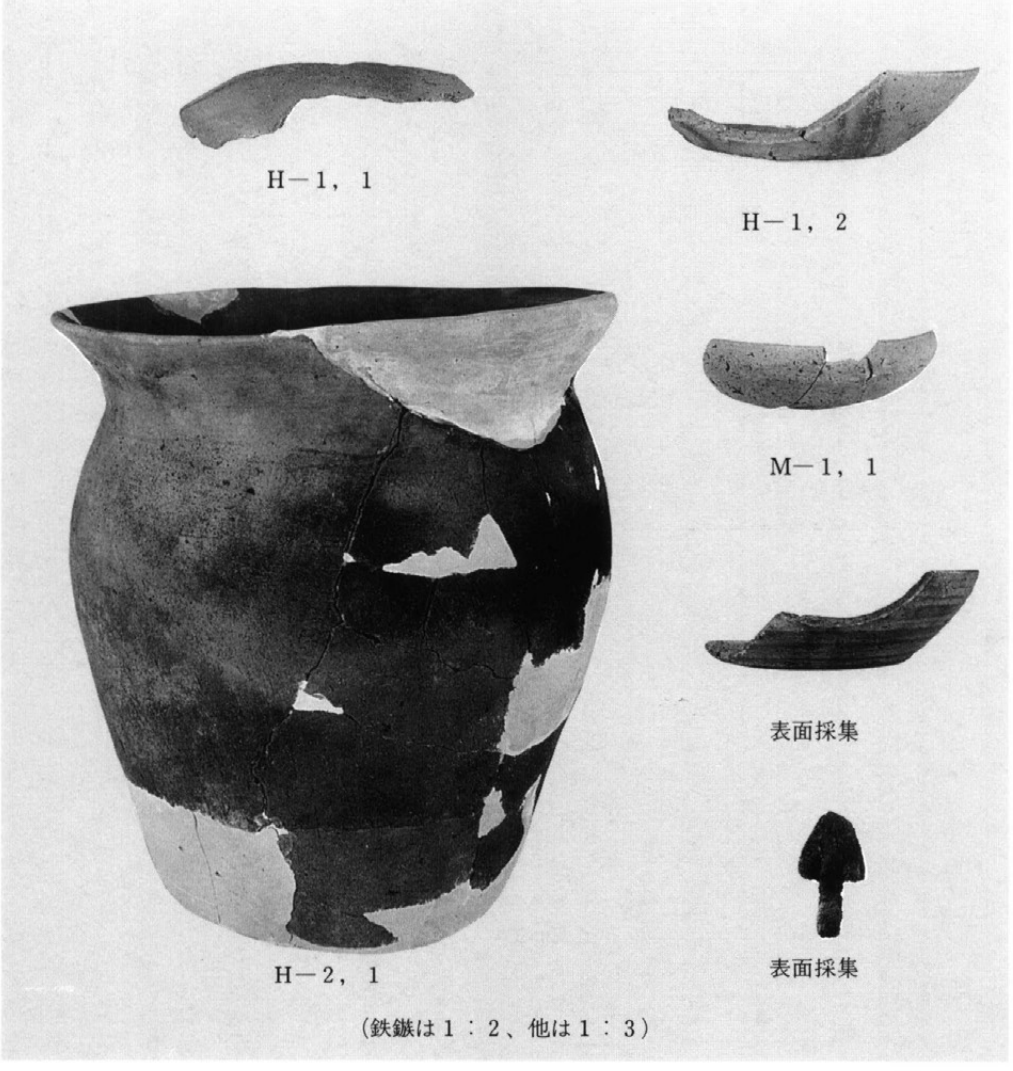
F—1号掘立柱建物址

F—2号掘立柱建物址

F—3号掘立柱建物址

図版四　F—4号掘立柱建物址・各遺構出土遺物

1　F－4号掘立柱建物址



（鉄鏃は1：2、他は1：3）

御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

第1集　1975　『馬瀬口下原古墳群』
第2集　1985　『野火付遺跡』
第3集　1985　『宮平遺跡』　—遺構編—
第4集　1986　『大沼遺跡』
第5集　1987　『前田遺跡』
第6集　1988　『十二遺跡』
第7集　1989　『根岸遺跡』
第8集　1989　『広畑遺跡』
第9集　1990　『聖原II遺跡』

※　この本には、中性紙（本文エミネ90kg・図版コート110kg）を使用してあります。

聖原Ⅱ遺跡

—長野県北佐久郡御代田町聖原II遺跡発掘調査報告書—
1990年3月25日　発行

編　集　御代田町教育委員会
発　行　御代田町教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社